

講演

# 「しんどい子」を支える学校文化 ～大阪府での外国につながる生徒への支援について～



**榎井 縁** 氏(えのい ゆかり)

大阪大学大学院  
人間科学研究科未来共創センター  
特任教授

皆さん、こんにちは。今、神奈川県ひがしの教育長の方から、本当に俯瞰的で包括的、かつ具体的な教育施策についてのお話がありました。私のほうは、大阪の現場から見えた大阪の取り組みをご紹介しますと思います。なかなか大阪の取り組みを全国発信をしたことがないということもあって、今日は大阪の子どもたちのことを頭に浮かべながら、お話をさせていただきます。

スライドをお願いします。このフォーラムの初めにありました日本語指導を必要とする高校生等の中退・進路状況について、全国と大阪府を比較した表をまず挙げています。

日本語指導を必要とする高校生等の中退・進路状況			
文科省・大阪府教育庁より	平成29年度		全高校生と比べて、 全国（大阪）
	全国	大阪府立	
<b>1. 中途退学率</b>			<b>7倍（3倍）の中退率</b>
日本語指導が必要な高校生等	9.60%	6.20%	
全高校生	1.30%	2.00%	
<b>2. 進学率</b>			<b>6割（8.8割）の進学率</b>
日本語指導が必要な高校生等	42.20%	66.70%	
全高校生	71.10%	76.10%	
<b>3. 就職者における非正規就職率</b>			<b>9倍（3.6倍）の非正規就職率</b>
日本語指導が必要な高校生等	40.00%	43.80%	
全高校生	4.30%	12.00%	
<b>4. 進学も就職もしていない者の率</b>			<b>3倍（1.5倍）の進学も就職もしていない者の率</b>
日本語指導が必要な高校生等	18.20%	9.70%	
全高校生	6.70%	6.50%	

「しんどい子」を支える学校文化  
 ~大阪府での外国につながる生徒への支援について~

日本語指導が必要な高校生、それから進学率等を見ますと、大阪の場合は全国に比べて2倍ほど割合が高くなっていることが分かります。ただ3を見ると分かりますように、非正規の就職率は全国とほとんど同じにもかかわらず、全高校生については大阪の割合が全国の3倍となっていることが分かります。つまり、大阪には日本語指導を必要とする高校生以外にも、さまざまな課題を持っている子どもたちが多くいるということが、ここからも分かります。

大阪のしんどい子という言葉を使いましたけれども、しんどい子というニュアンスは、問題児として排斥するのではなくて、社会的・経済的・家庭的に不利な状況にあって、教育課題を持つ子、そして学力や人間関係に課題を持つ子どもに対する愛着表現として使われ、その子どもたちの教育課題を中心に据えることで、集団全員を高めていくという子どもの底上げ、公正に力を入れるのが大阪の特徴です。

**子どもの“底上げ<sup>(公正)</sup>”に力を入れる  
 大阪の特徴**

**「しんどい子\*」への伝統的な教員の眼差し**

\*「しんどい子」のニュアンスは「問題児」として排斥するものではなく、社会的・経済的・家庭的に不利な状況にあって、教育課題を持つ子ども、学力や人間関係に課題を持つ子どもに対する愛着表現として使われる（新保2008）。その子どもたちを教育課題の中心に据えることで集団全員を高めていく。

そのことはこの図に書かれているequity、公正を求めるという教育を、特に同和教育、障害児教育、外国人教育の中で推進してきたという経緯があります。



「しんどい子」を支える学校文化  
～大阪府での外国につながる生徒への支援について～

ここに、進路問題ですけれども、1960年ごろから、仲間を結ぶ進路保障ということで、みんな一緒に学校に行くのだという形で、被差別部落出身者、障害者、在日朝鮮人の進路を保障していこうという動きがありました。そうした中、1970年代に、障害児の問題が出てきて、その高校進学に関する特別な措置というものがされたことを受け、1989年に外国人生徒の入学特別措置の制度が取られるようになったということです。

仲間を結ぶ進路保障

1960年代～

15の春を泣かせない・輪切りはごめんだ・みんな一緒に学校に行くや  
～被差別部落出身者、障害者、在日朝鮮人の進路への着目から～

進路に課題を抱えるグループのひとつに80年代後半から外国人（中国・ベトナム<インドシナ定住難民>）が浮上

1970年代障害児が健常児と共に学ぶインクルーシブ教育の取り組みが進む。1977年障害のある生徒に対する入学時の特別措置が開始、1979年知的障害のある生徒が府立高校に「準高生」として入学。当初は拡大解答用紙のみであったが、その後、**時間延長、点字受験、代筆回答、別室受験**などに拡張。



1989年**外国人生徒の入学特別措置制度へ**

これは日本語指導が必要な帰国生徒等に対する入試時の配慮の変遷を書いてあります。89年の障害児の時間延長を受けて、検査の時間延長をした後に、1つずついろいろな現場からの声を受けながら、辞書が2冊まで持ち込みになる、作文・小論文のキーワードが外国語で併記されるなど、少しずつ変わってきましたし、対象者に関しても年を追うごとに変わってきたのが分かると思います。

日本語指導が必要な帰国生徒等に対する入試時の配慮の変遷

年度	配慮事項	対象者
1989年度	検査時間の延長	原則として小学校4年生以上に編入
1990年度	日中辞典の持込み可	中国語
1991年度	日越辞典の持込み可	ベトナム語
1993年度	「ふりがな票」の配布	
1995年度	問題文へのルビ打ち	
1996年度	小論文における翻訳	すべての言語ex.『日比辞典』と『比日辞典』
1996年度	辞書の持込み2冊まで可	原則として小学校2年生以上に編入
2000年度	作文・小論文におけるキーワードの外国語併記	
2006年度		原則として小学校1年生以上に編入
2016年度	自己申告書の代筆	

「しんどい子」を支える学校文化  
～大阪府での外国につながる生徒への支援について～

### 「特別枠」校設置の変遷

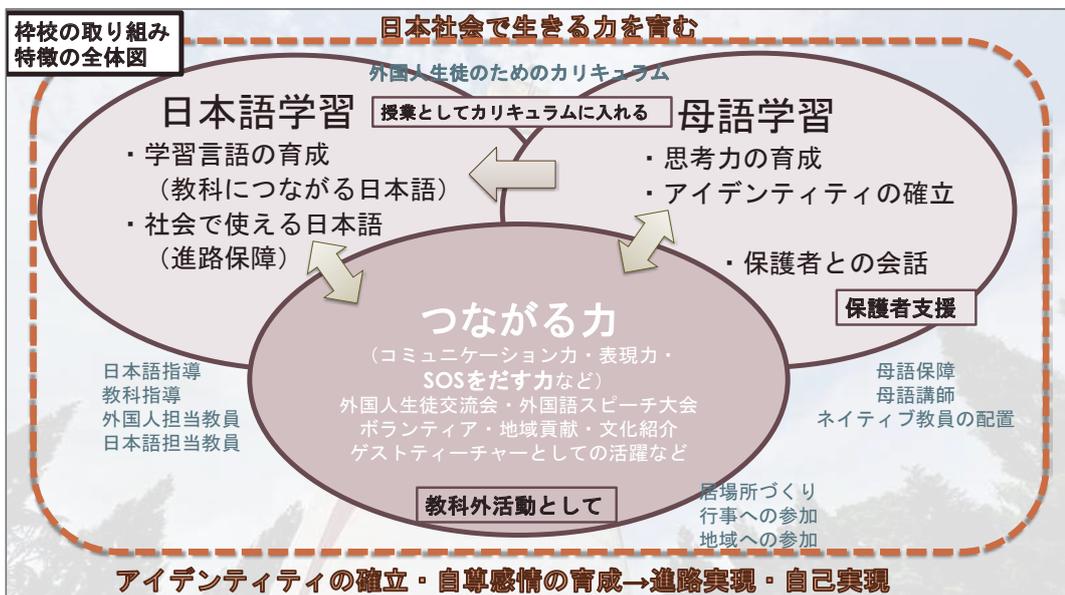
入試科目は数学、英語、作文（母語使用可、点数化されない）。中学時代の成績を考慮しない。  
各校募集定員の5%以内、9~16人程度

年度	名称	設置校 (括弧内は新設置校)	対象者
2001年度	「中国帰国生徒及び外国人生徒入学選抜」	2校（長吉高校、門真なみはや高校）	原則として小学校4年以上の学年に編入
2002年度		3校（八尾北高校）	
2003年度		4校（成美高校）	
2005年度		5校（布施北高校）	概ね小学校3年以上で日本語力に支障がある生徒も認める
2014年度	「中国等帰国生徒及び外国人生徒入学選抜」に改称		
2015年度		6校（福井高校）	
2017年度	「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学選抜」に改称	7校（東淀川高校）	
			2022年度 8校目（わかば高校）

次は特別枠校の変遷なのですが、元々は中国の子どもたちが増えて、その子どもたちが住むような集住地域に集中して入ってきていたという中で、高校改革が行われ、その中で特色を持つ学校の一つとして特別枠を持つ学校というのが制定されてきました。2001年度から始まって、少しずつ枠校が増えて、現在7校、そして来年度はもう1校増えるということです。

神奈川に比べると少数な学校ではあるのですが、学校の中にさまざまな取り組みが蓄積されてきたということについて、少しご説明したいと思います。

この図が枠校の取り組みの特徴の全体図です。20年以上積み上げられてきた中で、このような形で、今取り組みがされているということです。特徴的なものは、授業としてのカリキュラムの中に日本語学習と母語学習、そして母語学習には母語保障をする、母語を指導をする先生がいるということです。



## 「しんどい子」を支える学校文化 ～大阪府での外国につながる生徒への支援について～

そしてその大きな特徴としては、授業のカリキュラム外、教科外活動として、つながる力と書いてありますけれども、コミュニケーション力、表現力、そしてSOSを出す力を付けていくというさまざまな取り組みがされています。そして大阪の特徴ですけれども、アイデンティティーの確立、自尊感情の育成が進路実現や自己実現につながるというふうになっています。そしてそれを総称して、日本社会で生きる力を育むということ、母校がやってきたということです。

### 特別枠校の特徴的実践（母語）

- すべての子どもへの母語指導（ネイティブカルチャー）  
ネイティブ教員たちが積み上げてきたものへの評価  
母語の形成・維持、日本語の能力の伸長、自尊感情育成、  
居場所、ネットワーク形成、保護者支援
- 母語の使用を許容する\*教育実践 □ トランスランゲージング  
言語的少数者の言語や文化を取り込むことにより  
学校において疎外されるリスクが減少する  
\* 具体的には授業中に複数の母語が飛び交うような状況

特徴的な実践としましては、母語が挙げられると思います。母校に入ってくる全ての外国につながる子どもへの母語指導、ネイティブカルチャー指導というもので、これはネイティブの教員たちが初めから特別枠校にはいたわけなのですが、そのネイティブの教員たちが積み上げてきたものへの評価として、全ての子どもへの母語指導が行われるということです。

それによって、母語の形成・維持、そして日本語能力の伸長、自尊感情を育成すること、加えて、それをやることによって居場所、あるいはネットワークの形成、保護者の支援というものができるといえます。またそういうことがされているものですから、母語使用が実際の教室の中で行われています。これはよくトランスランゲージングといわれるもので、教室の中で、日本語だけではなく母語も飛び交っているという状況のことを表しています。

もう一つですが、キャリア形成に関しても特徴的な実践があります。それは外国につながる子どもたちが入学直後から、外国人支援担当教員と進路指導担当教員によってオーダーメイドのキャリアプランというものが立てられていて、その中に日本語検定や外国語検定、あるいは社会活動への参加経験を蓄積することによって、AO入試、推薦入試等が考えられること、そして進学費用の情報提供も早めに行われます。

そしてロールモデルやピア、先輩たちと出会うような仕組みがあり、外国人としての強みを生かすAO入試、推薦入試、特別枠入試というものがあるために、これは2003年から2018年の687のデータから割り出したものですが、母校生徒の半数が4年生の大学に進学しているということで、樋口・稲葉が言っているような、まさに間隙を縫うような進路選択がされているということです。

## 「しんどい子」を支える学校文化 ～大阪府での外国につながる生徒への支援について～

### 特別枠校の特徴的実践（キャリア形成）

- 入学直後から行われる外国人支援担当教員と進路指導担当教員によるオーダーメイドのキャリアプラン（日本語検定、外国語検定、社会活動への参加経験の蓄積、進学費用の情報提供、ロールモデル・ピアとの出会い<居場所>）  
☞外国人としての強みを生かす AO入試、推薦入試、特別枠入試  
枠校生徒の半数が4年生大学に進学（2003~2018年N=687のデータより）

「間隙を縫う」進路選択（樋口・稲葉2018）

エスニックな資源を活用するとともに、入学後のサポートを見据えた進路指導がされる  
=7年（高校3年+大学4年）を日本で生きていくための教育時間として保障し、  
生徒のライフチャンスの最大化を図る

枠校の卒業生インタビューを今年、行っています。40名ほど、枠校を卒業して10年ぐらいたった人から、卒業したばかりの学生も含めて、私のほうの科研でやった調査から明らかになったことをいくつかまとめてお伝えしたいと思います。まず1つに、高校時代には母語保障・日本語保障とその強みを生かした進路保障によって、母語や家庭で身に付けてきた文化が最大限に発揮できる支援がされて、外国人としての自己肯定感が育まれます。

2つ目に、特にこの傾向があるのですけれども、国際や言語専攻進学者というのがいます。エスニシティを積極的に資源として活用して、高校時代の経験が、それを母語にとどまらない広い視野に促進させていたという傾向がありました。

### 枠校卒業生へのインタビュー調査より明らかになったこと

ニューカマー外国人の教育における編入様式の研究

- ① 高校時代には、母語保障・日本語保障とその強みを活かした進路保障により母語や家庭で身に付けてきた文化が最大限に発揮できる支援がされ、外国人としての自己肯定感が育まれる。
- ② 国際・言語専攻進学者はエスニシティを積極的に資源として活用、高校時代の経験がそれを多様（母国に留まらない広い視野）に促進させていた。

## 「しんどい子」を支える学校文化 ～大阪府での外国につながる生徒への支援について～

### 枠校卒業生へのインタビュー調査より明らかになったこと

ニューカマー外国人の教育における編入様式の研究

③ 主流社会の中でそれらが無化されたり差別体験に遭遇する際に、それへの抵抗や対処といったことを実践していた。

④ 就職した者たちは、様々な困難に遭遇しているケースが多かったが、何れも高校で身に付けたハイブリッドな資源を駆使して状況に対応していることが見られた。

→ いずれも高校時代にエスニシティが尊重されるという「承認」の経験を積んでいることが大きな力になっている

そして3番目が、これは主流社会に出て行ってから、無化されたり差別体験に遭遇するといった経験をたくさんしている子どもたちがいたのですが、それに遭ったときに、それへの抵抗や対処といったものを、高校時代に培ったものを元実践していたということです。そして就職した人たちも、さまざまな困難に遭遇しているケースが多かったのですが、いずれも自分が身に付けたハイブリッドな資源を駆使して、状況に対応しているというように見られています。

もちろん、負の面もたくさん出てきたのですが、この中では特によかった部分をピックアップしています。それらを総合すると、やはり高校時代にエスニシティが尊重されている、承認という経験を積んでいるということが大きな力になっていることが分かりました。

ここで、大阪におけるアクターについてご紹介したいと思います。まず教育行政があります。府の教育委員会ですけれども、実は1988年に在日韓国・朝鮮人問題に関する指導の指針というものをを出していて、その指針を基に学校教員組

## 大阪におけるアクター

### 教育行政

- ・ 府教育委員会 在日韓国・朝鮮人問題に関する指導の指針 88

### 学校・教員組織

- ・ 大阪府外国人教育研究協議会（府外教） 大阪府立学校在日外国人研究会（府立外教） 設立 92

### 地域の支援団体

- ・ 国際交流協会・子どもの居場所や学習支援団体やNPO

2000～2008年頃までに様々な仕組みを創出

就学前相談会・就学ガイドブック・日本語教育支援センター・教育サポーター養成・JSLカリキュラム

多言語進路ガイダンス 神奈川から98年に豊中市が導入、99年に大阪市で開催、

2004年からは大阪府全域を7地域にわけて行政、学校、NPOが役割分担をしながら毎年開催されている

## 「しんどい子」を支える学校文化 ～大阪府での外国につながる生徒への支援について～

織として、92年に府外教、府立外教と書いてあるのですが、学校、先生たちの外国人教育に関わる組織ができています。

3つ目に地域の支援団体ということで、国際交流協会や子どもの居場所、学習支援団体やNPOができています。これは神奈川の事例とは違ってまして、神奈川のように各地域の日本語支援のところから子どもの支援、そしてそれがNPOになっていくという形とは少し違っていて、まだここの連携は今、模索されているという状況です。

ただ、大阪府全体としては、2000年から2008年までに外国人の子どもたちを支援するようさまざまな仕組みが創出されています。そこに書かれているようなものが仕組みとして、あるいは制度としてできているという形で、最後に参考文献を挙げますけれども、ホームページ等を見ても、多言語でのさまざまな案内が一応できているという感じです。

その中でも着目できるものは、神奈川県から98年に豊中市が導入した多言語進路ガイダンスというものです。99年に大阪で開催されたのですが、2004年からは大阪府全体を7地域に分けて教育行政と、そこにある中学校・高校、そしてNPOの三者が必ず役割分担をしながら、ガイダンスを開くということがされるようになりまして、今は毎年、主体的にその三者が中心になって、各地で多言語進路ガイダンスが行われるというふうになっています。

大阪でも、外国につながるある子どもたちの進路について、幼保小中高の先生あるいは関係者が一堂に集って考えるという動きがあったのは、ごく最近のことです。最後にこのことを紹介して終わりたいと思っています。

先ほど言った大阪府の外国人、大阪府の在日外国人教育研究協議会というところが、12月7日に帰国・渡日の子どものたち、大阪では外国につながるある子どもたちをこう称しますけれども、帰国・渡日の子どものたちの進路を保障するためにということで、18年間の育ちを踏まえて、展望のある未来をというもので、就学前、小中高までの関係者、NPO、学校の先生、教育委員会の人たちが集まって、話し合うということを初めて行いました。

主催 大阪府在日外国人教育研究協議会

**帰国・渡日の子どものたちの進路を保障するために**  
～18年間の育ちを支え、展望のある未来を！～

シンポジウム

**日時** 2021年12月7日(火)  
14:00～17:00(受付 13:30)

**会場** 東成区民センター 小ホール  
(大阪メトロ「今里」駅すぐ)

**申込** 府外教 ([fugaikyo@nifty.com](mailto:fugaikyo@nifty.com)) へ  
申し込んでください。  
①お名前 ②所属 ③メールアドレス  
④参加形式(会場 or Zoom)  
を必ず記入して送信してください。

※当日、参加者からも意見を集約するため、ネット環境のあるスマホやタブレットなどの端末をご持参ください。(なくても参加可能です)

就学前～小学校～中学校～高校卒業までの  
帰国・渡日の子どものたちの育ちを長期的に捉え、  
現在地と課題、今後の展望について共に考えましょう!

ここでは、子どもたちが将来に展望を持ち、自分の強みを生かして社会参画するために、どのようなことが必要なのかということが、幾つか話されました。1つは子どもたちを受け入れるための学校体制づくりということで、子どもはどの年齢で来ても、学校が、あなたがいてくれてうれしい、あなたのことがもっと知りたいという雰囲気づくりをすることが大事だという話が出ました。特に初期対応といって、子どもが初めて学校に来るときに、教員がその子どもの母語を

## 「しんどい子」を支える学校文化 ～大阪府での外国につながる生徒への支援について～

### 子どもたちが将来に展望を持ち、 自分の強みを生かして社会参画するために

- 子どもたちを受け入れるための学校体制づくり  
「あなたがいてくれてうれしい」「あなたのことがもっと知りたい」という雰囲気づくり 初期対応でまず教員が母語であいさつ
- 学習環境や日本語を含む学力保障  
学習言語習得の日本語指導や教科指導や「やさしい日本語」の活用  
子どもの願いに根ざした学習 まわりとつながるための日本語
- 高校入試制度・受験時の配慮や情報提供  
就学歴・入国時期や渡航歴も必要との認識のもと  
公簿の正確な記載や丁寧な引き継ぎが必要
- 高校生活と将来への展望  
社会に出る前の時期こそ外国にルーツのある「強み」や「よさ」を  
自覚できるような働きかけ 社会の中でどう生きたいのか一緒に考える

覚えて、一言目を母語であいさつしましょうという話がありました。

それから2つ目は学習環境や日本語を含む学力保障をどうするのかといったところで、学習言語習得のための日本語指導あるいは教科指導や、やさしい日本語をもっと活用しないといけないという話がありました。また子どもの願いに根ざした学習で、日本語も学習のためだけではなく、周りの子ども、親、支援者とつながるための日本語というものを保障していかななくてはいけないという話がありました。

そして3番目は、高校入試制度や受験時の配慮、情報提供ということです。就学歴や入国の時期、渡航歴というものが必要だという認識の下、公簿の正確な記載あるいは丁寧な引き継ぎが必要だということが言われました。特に子どもの情報となると、個人情報ということで就学歴や入国時期、あるいは在留資格を出すことを嫌がる学校もあるのですが、実際に子どもが日本の中で自己実現していくには、この辺りの情報が正確でなければ、高校の入学あるいは大学への進学、将来を考えると、それは不可欠なものだということで、幼小中高というふうに公簿の正確な記載をしていこう、連携していこうということが確認されました。

そして最後に高校生活と将来への展望ということで、社会に出る前の時期であるからこそ、外国にルーツがあることが強みとかよさなのだとことを自覚できるような働き掛けをし、社会の中でどう生きたいのか、一緒に関係者が考えることが必要ではないかということが話し合われました。

先ほどの高校の枠校と同じような図式になっていると思いますけれども、やはり子どもの育ちを不断に支援することという、要するに進路保障はネットイコール高校進学支援、つまり中学校3年生の進路指導の先生の問題などではなく、日本に来てから育っていく子どもたちを校種によって分断してしまわないようにするためにはどうするべきなのかということで、それぞれに行ってきた支援を子どもの未来につなげて考えることが大事だと思っています。

やはり日本で生きる力には、アイデンティティーを確立すること、自分が自分であること、あるいは自分がさまざまな経緯を経て日本の社会に今いることに対して大事だと思えるような感情を持つこと、それを励ますこと、そういうことがあってこそ、日本の社会に自ら参画して行って、自己実現できるのだということを、参加者で共通認識を図っていったということです。

## 「しんどい子」を支える学校文化

～大阪府での外国につながる生徒への支援について～

子どもの育ちを不断に支援すること  
 進路保障≠/≠高校進学支援  
 中学3年生の問題ではなく幼保小中高をつなげる  
 それぞれ行ってきた支援を  
 子どもの未来に繋げて考えること

日本で生きる力  
 アイデンティティの確立・自尊感情

社会への参画・自己実現へ

まずはアイデンティティの確立のときに何が必要なのかというと、1つはロールモデル、要するに自分と同じようなルーツを持つ、あるいは自分のように外国ルーツであるとか、日本語がなかなか難しかったけれども、このようにやって社会に出ていった、大学生になったというようなロールモデルになる人との出会いをつくる、それはなかなか今、探すのは難しいかもしれないのですが、遠隔でつなぐこともできるのではないかと思います。今話していることは、実は次のセッションとも関係するので、早く終われば次のセッションにいきたいと思っています。

それから2つ目のアイデンティティの確立と活躍の場をつくるというのは、すごく大事です。大阪では、例えば地下鉄でインバウンドがたくさんあった頃は、外国人の方で困っている方に対して、高校生が案内を各言語でやるというよう

## アイデンティティの確立

↓  
 ロールモデルとなる人との出会い（遠隔でもOK）  
 活躍の場（ボランティア、作文や文化発表、生徒交流会）  
 ↓  
 母語や母文化支援

## 社会への信頼とつながり

↓  
 地域の国際交流センターやNPO、他の外国ルーツの仲間  
 ↓  
 子どもの国や文化を知る学習会 多言語表示ややさしい日本語  
 ↓  
 差別を許さない仲間・環境

## 日本語教育と学力保障

↓  
 地域の日本語教室、ICTを活用した日本語指導  
 ↓  
 様々な教材（情報収集や情報交換）

## キャリア教育と進路情報の提供

↓  
 制度や情報を把握し、早期に伝える（母語での入試情報）  
 ↓  
 多言語進学ガイダンス 職業体験 高校や大学などへの見学会  
 ↓  
 特別枠入試や配慮事項、奨学金制度

## 「しんどい子」を支える学校文化 ～大阪府での外国につながる生徒への支援について～

なボランティアをして、大阪のメトロから表彰されたこともあります。そういう社会的な奉仕や活躍の場、それから作文を書いたり文化発表をしたり、地域でそういうことをしたり、あるいは同じ高校生同士が交流会とって、集って合宿をして、自分たちの思いを語り合うようなことです。

そして今言ってきた母語や母文化支援というのは、今日は大阪の高校での取り組みはしましたけれども、やはり大阪では小学校就学以前、小学校、中学校の中でも、ルーツの言葉、ルーツの文化を支援することを積極的にやっています。それは取りも直さず、大阪では在日コリアンの子どもたちの取り組みが歴史的に積み上げられてきた背景もあって、それが本当に大事だということがみんなでも共通認識されてきたし、これからもそれがなくてはならないということで行っています。

2つ目が社会への信頼とつながりです。神奈川などでは、かなり地域やNPOとのつながりがたくさんできていることが分かりました。大阪全体としては数は多いのですが、子どもたちの状況を見ると、1校に1人や2人というような子どもが多いです。

そういうときに、やはり大阪でも地域の国際交流協会やNPOを通して、いろいろな仲間をつくる、先ほどつながりというものが高校でも大事だと言っていましたけれども、それは小さい頃から外国ルーツの仲間とつながること、それから子どもの国や文化を知る学習会や学校の中での多言語表示ややさしい日本語をすること、そして仲間づくりの中で、やはり差別を許さない環境、何かがあったときにそれはおかしいと言えるような周りの友達をつくろうということ、積極的にやっつけていこうということです。

そして3つ目が日本語教育と学力保障ということで、地域の日本語教室あるいはICTを活用した日本語指導は、特にコロナ以降に取り組みが進んだ部分ではありますが、まだそういうことをしていけないといけません。そして日本語教育に関しても、なかなか目の前の子どもたちのことで手いっぱいになってしまうのですが、実はさまざまな教材もあって、情報収集や情報交換を大阪府の中でやっていくこともあまりできていないことも確認されています。

そして最後に、それをキャリア教育と進路情報の提供につなげていくということで、やはり制度や情報の把握ということと、子どもにとっては早期に伝えることが大事で、中学校3年生になって入試情報を伝えても遅すぎるということで、多言語進学ガイダンスにも、中学校に入ってからなるべく早く参加する、特に保護者の人たちの理解を得るためには、多言語の情報というものが大事です。あるいは職業体験や、高校や大学などの見学や体験なども必要だということです。

そして最後に特別枠の入試や配慮事項というものに、年限や資格があるものもありますので、そういう制度あるいは奨学金制度等についても、細かな情報を出していけないといけないということです。この全体の流れそのものを、全ての外国に関わる関係者で共有していく、日本に来て18年間の学びをつなげて見ていくということが大事だろうと確認されています。

そして、今、現場の意見を集約されながら、大阪府の外国人教育研究協議会がリーフレットを作っている最中です。ご覧の全国の皆さんも、もう少しするとこのリーフレットがあげられると思いますので、このようなものもぜひ参考にしてください。いただければいいかと思いました。

参考文献です。3分ほど残っていますけれども、次のセッションにつなげたいと思いますので、私の話はこれで終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。